Changes related to
stall holders

甚目寺観音 暮らしの朝市

東別院 暮らしの朝市

みんパタ 暮らしの朝市

ひがほん 暮らしの朝市

お寺と暮らしプロジェクト

暮らしの朝市

2025
Vol.01
Spring

暮らしの朝市 REPORT

Theme: Changes related to stall holders

Kurashi no Asaichi Report

はじめに

Introduction.

私たちが定期開催を始めた甚目寺観音暮らしの朝市は2011年に始まり、コロナ禍の中で10周年を迎えました。東別院暮らしの朝市は 2024年5月に11年目を迎えました。

この10年という節目のタイミングでこれまで継続してきた暮らしの朝市から、どのような営みが生まれ、どのような影響が広がっているのかを、改めて見つめなおしたいと考えるようになりました。良いことだけでなく、課題を含めた正負両面の影響――すなわち“インパクト”を、私たち自身だけでなく、関わるすべての人々とともに捉え、定量的かつ客観的に可視化していくこと。

暮らしの朝市という取り組みの本質的な価値を明らかにしていきたい――そんな想いから、このプロジェクトは生まれました。2025年の1年間を通して、出店者・来場者・地域など多様な視点から“これまで”の変化を記録し、その積み重ねを“これから”につなげていきます。

今回のレポート（Vol.01）では、代表インタビューと出店者アンケートをもとに、出店者にどのような変化が生まれているのかに焦点を当ててまとめました。暮らしの朝市をきっかけに生まれたインパクトが、どのように広がり、誰かの暮らしや地域とつながっているのか。このレポートが、私たちの暮らしにおける価値を見つめなおすきっかけとなれば幸いです。

今後のレポート

このレポートは、2025年の1年間を通じて継続的に発行していきます。今後は、来場者アンケートの実施や、地域で関わる人たちへのインタビュー、さらには社会的な指標との照らし合わせなどを通じて、「暮らしの朝市が生み出しているインパクト」の全体像をより明らかにしていく予定です。
そして 2025 年の年末には、出店者・来場者・地域、それぞれの視点を重ねた「暮らしの朝市 インパクトレポート」として、関わるすべての人に、私たちの取り組みの伝えていきたいと思います。

暮らしの朝市とは？

About “Kurashi no asaichi”

つくる人と、つかう人が、ともに育てる朝市。

毎月決まった日に開かれる、
子どもからお年寄りまでが楽しめる、暮らしに寄りそう場所。
畑で育てた野菜や、手づくりの道具やお菓子が並び、
作り手と使い手が顔を合わせて話が弾みます。

きっかけは、「自分で育てた野菜を届けたい」という小さな思いから。
でもせっかくなら、もっといろんな人が集まれて、
暮らしごとまるごと受けとめられる場にしたい。
そんな想いが重なって、「暮らしの朝市」は少しずつ育ってきました。

ここでは、「これ、私が作ったんです」と話す人がいて、
「また来たよ」と声をかけるお客さんがいて、
子どもが遊び、大人がつながり、挑戦が育ちます。
完璧じゃなくていい。できることを少しずつ。
そんな“生き方のリズム”が自然と刻まれていく場所です。

モノの売り買いだけではなく、
誰かとつながりながら生きることを大切に、
自分らしい暮らしを実感できる場所――それが、暮らしの朝市です。

代表からの言葉

Message

このレポートは、私たち「暮らしの朝市」の14年の歴史です。
最初は「10年続けられたらいいな」と思いながら始めた朝市も、気がつけばあっという間に月日が流れ、開催場所も増え、規模も大きくなりました。
その中で、私たちが大切にしてきた想いや、これまでの道のりを知らない方も増え、これからの展開を考えた時に、「今までのことをちゃんと伝えたい」と思う気持ちが強くなり、このレポートをつくりました。
時代が大きく変わっていく中でも、私たちらしく無理のない歩みで、次の10年、20年と繋げていけたらと思っています。
そして今回のレポートづくりは、初期の頃から会場マップやホームページなど、ハード面で支えてくれている（株）レジスタが一緒に取り組んでくれました。長く共に歩んできたからこそ、私たちの想いや出来事を、わかりやすい形にまとめてくれました。
暮らしの朝市に関わってくれているすべての皆様へ。
いつもありがとうございます。
そしてこれからもよろしくお願いします。

暮らしの朝市 REPORT Vol.1

TABLE OF CONTENTS

はじめに / 今後のレポートについて	01
暮らしの朝市とは?/ 代表からの言葉	03
暮らしの朝市の紹介	05-06
これまでの暮らしの朝市	07-08
暮らしの朝市から生まれたもの	09-12
代表 飯尾 うららが考える、暮らしの朝市	13-14
共同代表 飯尾 裕光が考える、暮らしの朝市	15-16
出店者の声	17
暮らしの朝市の基本情報	18

暮らしの朝市の紹介

Introduction of “Kurashi no asaichi”

東別院 暮らしの朝市

開催日：毎月 8 日・18 日・28 日
時間：10:00-14:00
場所：真宗大谷派名古屋別院

買い物を通して新しい出会いが生まれ 暮らしを豊かにする

2020年7月に、毎月 3 回開催としてリニューアルしました。ありとあらゆるてづくり屋台が東別院の境内を埋め尽くし、お子さま連れでも買い物しやすくゆったりと楽しめる場所で、暮らしを豊かにするアイデアとつながりが生み出す楽しみを色々なカタチで提案します。

8th オーガニックをキーワードとした出店者さんが集まっています

2015 年に始まった「ミーツオーガニックマーケット」の出店者さんがメインとなり、オーガニックをキーワードとした出店者さんが集まります。他のどの日にちよりも無農薬の野菜や加工品などの食卓を彩る安心安全な食材が揃います。陶器や古道具などの日用雑貨も充実しています。

18th 新しい出会いを求めて 先鋭的で個性溢れるお店が充実した朝市

ちょっと先鋭的で格好良い今どきのお店を中心に個性溢れる出店者さんが集まっています。刺激や新しい出会いが欲しくなったら、是非 18 日に遊びに来てください。もちろんおいしい食べ物や生活雑貨まで充実した店舗が揃っています。

28th 人気のキッチンカーや 行列必須のあのお店まで 安定感のある老舗のお店がずらり

開催当初からずっと変わらず東別院を盛り上げてくれている、いわば朝市の顔的存在の出店者さんが揃っています。人気のキッチンカーや行列必須のスイーツのお店も沢山あります。お越しになる前には、各店舗の情報を一度チェックしてみてください。

甚目寺観音 暮らしの朝市

開催日：毎月 12 日
時間：10:00-14:00
場所：甚目寺観音境内

楽市楽座が現代に蘇る小さな手作り朝市

昔から毎月 12 日は、甚目寺観音の楽市楽座が行われていましたが、時代とともに衰退してしまいました。その場を引き継ぎ、2011 年に生まれ変わり、小さなてづくり朝市が誕生しました。毎日の暮らしをちょっと豊かにするてづくり品の屋台が集まります。私達の朝市の原点です。

みんパタ 暮らしの朝市

開催日：毎週土曜
時間：10:00-14:00（第 1・3 週）
10:00-12:00（第 2・4・5 週）
場所：みんパタ農園 のこぎり屋根倉庫

お散歩感覚で立ち寄れる朝市が 毎週土曜日に開催

私たちの本拠地 INUUNIQ VILLAGE やみんパタ農園のすぐ隣にある『のこぎり屋根倉庫』で毎週土曜日に開催しています。みんパタや近隣の農家さんの野菜やこだわりの食べ物や生活雑貨を集めました。特別なお買い物ではなくて、土曜日の朝ゆっくり起きてブランチがてらふらりと立ち寄れるような暮らしに寄りそう朝市です。

ひがほん 暮らしの朝市

2025 年 6 月 8 日スタート

北海道札幌市に進出！ ひがほん暮らしの朝市

開催日：8 日及び第 4 日曜日
時間：10:00-14:00
場所：東本願寺札幌別院

北海道の豊かな大地が育む農作物や、つくり手の想いが込められた品々を、直接手に取って感じていただける場所をつくりたい。
人と人がつながり、新しい交流が生まれること。
新しい文化や産業が芽吹いていくことを、心から願っています。

Hisaya market 毎月10日、都会にひらくオアシス。

開放的な芝生の上で、ゆっくりお食事やお買い物を楽しみながら、新しい人や文化と出会える …
そんな都会で暮らす人にとってのオアシスのような存在を目指しています。

開催日：毎月 10 日
時間：10:00-15:00
場所：Hisaya-odori Park zone1 シバフヒロバ

東海マルシェサミット 暮らしの市から産業を組み立てる、語りと出会いの場

マルシェサミットは、朝市・マルシェの作り手・売り手・研究者・地域の担い手が集まり、「マルシェ･朝市発の経済」を語り合い、これからの産業と社会のかたちを共に描く場。知恵を持ち寄り、アイデアを耕し、次の 10 年へ踏み出します。

開催日：年に 1 回
場所：各地で順に開催

これまでの暮らしの朝市

Previous “Kurashi no asaichi”

暮らしの朝市は、2011年に小さな集まりから始まりました。「自分で育てた野菜を売りたい」という想いを出発点に、少しずつ人が集まり、出店者・来場者・関係者それぞれの手で育てられてきた場です。
そんな 14 年以上の朝市での出来事や工夫、変化の積み重ねが朝市の物語を少しずつ形づくってきました。

2011.3.12

甚目寺観音 てづくり朝市スタート

「自分で育てた野菜を売りたい」という想いから 2 店舗でスタート。でも、せっかくなら野菜だけでなく、手作りの品も置いて子どもからお年寄りまでたくさんの人が集まる場所にしたい！そんな想いで 2011 年から始まりました。

2011

2013

2013.5.28

東別院 てづくり朝市スタート

甚目寺観音てづくり朝市の盛り上がりの噂を聞いた東別院職員が甚目寺観音に訪れ、別院での開催をオファー。真宗大谷派名古屋別院（東別院）の宗祖である親鸞聖人の命日である 28 日に開催。広い境内に所狭しとテントが並び、最大 220 店舗ものお店が並ぶ東海地方最大の定期市となる。

2014

2014.11

「みんパタプロジェクト」の前身となる「津島本町ぐるぐる市場」がスタート
私たちが暮らす津島市での活動が始まる。津島駅周辺、天王通りの活性化、地域のつながり、コミュニティづくりを目的として毎月第 3 日曜日に開催。1 年間の定期開催を経て、尾張地方の多様な食文化や豊かな農環境を有効活用する都市近郊型体験農園「みんなの畑＝みんパタ」プロジェクトへと発展。

2016

2016

ミーツオーガニックマーケットスタート
未来を思って一歩踏み出すきっかけとなる場を目指して、独自のオーガニック規定を作り運営。コアな熱いファンに支えられ、身体や環境に配慮した市へと成長。

2017

2017

ハハトコマーケットスタート

2020

2020.2

コロナ渦突入

2020.3

みんパタ暮らしの朝市スタート

コロナ渦、暮らしの朝市だけでなく地域のマルシェイベントが軒並み中止となる中、出店者の収入源を守るため、みんパタ農園の農業用ハウスで朝市をスタート。野菜の収穫体験や、田植え、稲刈りなどの農的ワークショップも同時に開催。地域の暮らしを支える場を目指して活動している。

2020.6

買い物支援の市

2020.7

緊急事態宣言下での朝市開催継続についての嘆願書

緊急事態宣言が出る度に中止になるのを避けるため、有志の出店者で別院に開催継続に向けての嘆願書を提出。てづくり朝市はイベントではないこと、暮らしの一部としてはなくてはならないものであることを理解してもらうために沢山の嘆願書が集まり、緊急事態宣言下での開催の許可が下りる。

2020.7

東別院暮らしの朝市としてリニューアル

買い物支援の市での経験を踏まえ、小規模、複数回の開催に舵を切る。毎月 28 日に開催していた「東別院てづくり朝市」と毎月 12 日に開催していた「ミーツオーガニックマーケット」の 2 つが合体。「東別院暮らしの朝市」に名前を変えて、月に 3 回の開催（8 日、18 日、28 日）となったことでより暮らしに根付いた朝市になり、地域に定着した。

2021

2021.3

ミッドランドスクエア・サスティナブルマルシェスタート
「サスティナブル（持続可能）」な暮らしの提案をコンセプトに、春と夏の年 2 回開催。

2022

2022.4

HISAYA MARKET スタート

暮らしを豊かにする様々な商品が並ぶだけでなく、芝生の公園の立地を生かし、ゆっくりお食事やお買い物を楽しみながら、新しい人や文化と出会える、都会のオアシスのような存在を目指している。毎月 10 日開催。

2022.11

第一回 OKINAWA ORGANICAL MARKET 開催。
障害者が自然栽培に取り組みながら地域とつながるプロジェクト「自然栽培パーティ」の全国フォーラムと同時開催。初の沖縄での出張開催。愛知と沖縄のつくり手が海を超えて交流した貴重な機会となり、今でも出店者同士の交流が続いている。

2024

2024.2.1

第 2 回 OKINAWA ORGANICAL MARKET 開催
中城村の暮らしの発酵ライフスタイル＆リゾートで開催。

2024.2.19

第 1 回東海マルシェサミット開催（東別院）
マルシェ多発による客の分散や売上の低下、ゴミ問題など、各マルシェの様々な問題を課題解決に向けて話しあう場として、東別院で開催。東海地方のマルシェ関係者が 150 人参加し、運営者が何を大切にしているのか、出店者はどのような想いで商品を作り販売しているのかを共有し、コロナ禍を経て変化した社会の価値観を柔軟に取り入れ、持続可能なマルシェ文化を築く為に何が必要か考える会となった。

2025

2025.2.17

第 2 回東海マルシェサミット開催（柳ヶ瀬商店街）
第 2 回目は、岐阜のサンデービルヂングマーケットの会場でもある、柳ヶ瀬商店街で開催。

暮らしの朝市から生まれたもの

── 出店者に関わる変化 ──

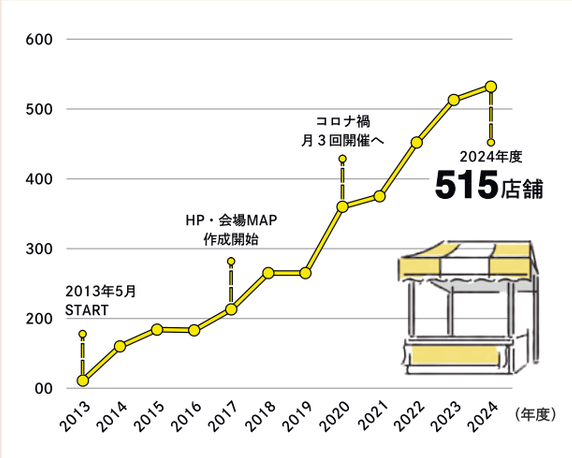
Born of “Kurashi no asaichi”

暮らしの朝市は、単なる「売る」「買う」の場所ではありません。出会い、会話、小さな挑戦、そしてそこから広がる暮らしや仕事。朝市という場から、たくさんの新しい“いとなみ”が自然と生まれてきました。朝市を通じて生まれたさまざまなつながりや挑戦、暮らしの変化を紹介します。

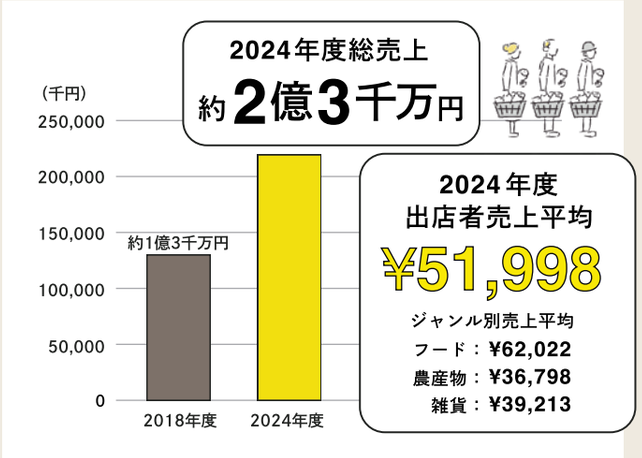
01 小さな経済圏が地域に根づき「持続可能な暮らし」が広がる

「暮らしの朝市」は、単なるモノの売買を超えて、人と人とのつながりの中に“経済”がめぐる場。
手づくりのものを、自分の言葉で届ける営みが、月に一度の出店を日常につなげ、小さな経済の循環を育んできました。
こうした営みの積み重ねが、今回のアンケートと売上集計から、“数字”としてはっきりと見えるようになってきました。

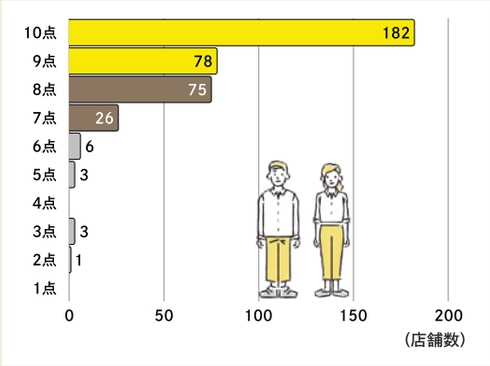
年間出店者数



年間総売上と売上平均



2024年度の年間出店者数は515店舗、総売上は約2億3千万円に達しました。さらに、1出店あたりの売上平均は¥51,998。これは朝市が“一度きりのイベント”ではなく、出店を重ねることで「自分のつくったものを届けて暮らしにつなげる」持続可能な場として機能していることを示しています。出店者からは「続けたことで注文が増えた」「この収入があるから挑戦できた」といった声も届いており、暮らしに根ざした営みの積み重ねが、今回の数字からもはっきりと見えてきました。



出店者満足度評価（10段階）

出店者の満足度を10点満点で尋ねたアンケートでは、9点以上が69.6%、7〜8点が27.1%、6点以下はわずか3.5%と、高い評価が得られました。
「お客さんとの交流が楽しい」「自分らしく出店できる」「出店仲間とのつながりが心強い」などの声が多く、売上だけではない“場の価値”を実感している様子がうかがえます。
こうした満足度の高さは、継続出店や口コミによる新規出店にもつながっており、暮らしの朝市が“営みを続ける場”として根づいていることを示しています。

暮らしの朝市が育む、“持続可能な暮らし”の土台

暮らしの朝市は、「月に一度のマーケット」という単位を超えて、「小さな経済が回る地域の土台」「誰かの暮らしとつながるコミュニティ」として成長してきました。
数字で見ることで、見えにくかったこうした“いとなみ”の「厚み」が浮かび上がります。そしてこれからも、続けることで地域に「無理のない小さな経済」を根づかせ、持続可能な暮らしを共に作っていきます。

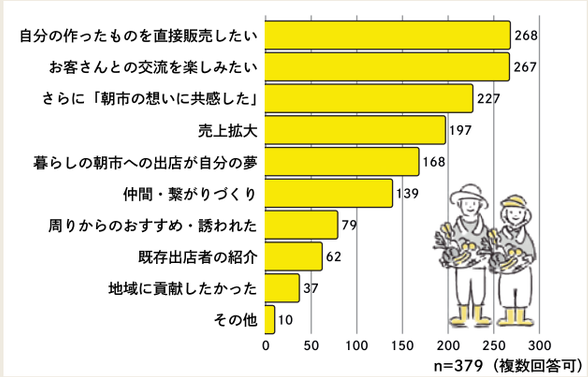
02「自分らしい暮らし」が選べる社会

「暮らしの朝市」は、「こうしなきゃいけない」ではなく、「自分らしい働き方」「自分らしい暮らし方」を見つけていける場です。家族や子育て、他の仕事と両立しながら無理なく続けられるだけでなく、出店を通じて新しい一歩を踏み出す人も少なくありません。今回の調査では、朝市を通じて生まれた「自分らしい暮らし」の実践が、具体的な数字で見えてきました。

出店者のライフスタイルの変化

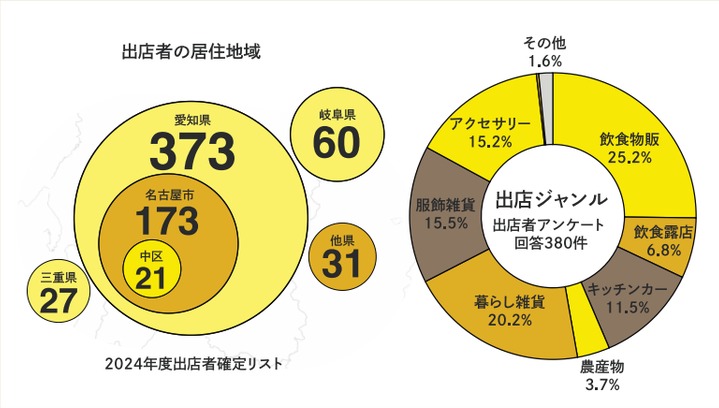
暮らしの朝市は、収入にとどまらず、“自分らしい暮らし”をつくる場であることが、データからも見えてきました。

出店理由

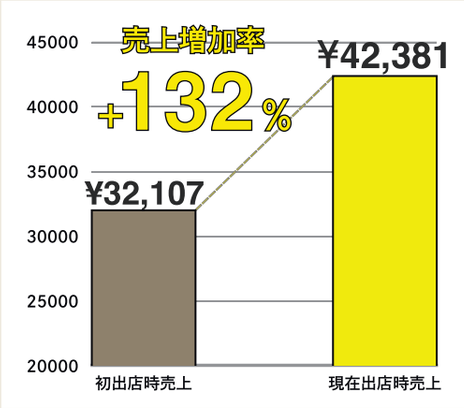


「売る」だけでなく、「想いを伝えたい・共感したい」気持ちが動機になっています。

出店者の多様性



売上増加率



出店ジャンルは食品や手仕事、農産物、リラクゼーションなど多様で、地域も名古屋市内から三重・岐阜、さらには県外まで幅広く広がっています。世代や職種、暮らし方の異なる人々が集まり、それぞれの“自分らしさ”を表現できるこの場所には、「チャンプルー（ごちゃまぜ）」な魅力が根づいています。また、出店を重ねる中で、販売の工夫やファンづくりが進み、売上にも前向きな変化が生まれています。
無理のないペースで続けられる、“自分の暮らしに根づく営み”がここには育っています。

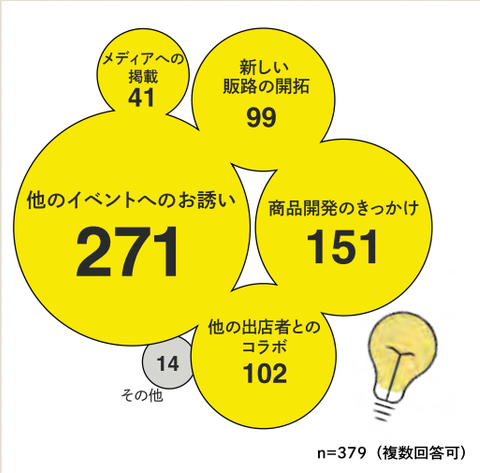
「こうありたい暮らし」を育てる、小さな始まりの場

暮らしの朝市は、「売る・買う」のその先、一人ひとりの「こう生きたい」がかたちになる場として続いてきました。
毎月の朝市は、ただの“イベント”ではなく、出店者一人ひとりの暮らしを支え、ともに育て合う時間です。数字やエピソードを通して見えてきたのは、「静かだけど確かな変化」。これからも、誰もが“自分らしい暮らし”を描ける社会へ。
暮らしの朝市は、その最初の一歩を支える「小さな始まりの場」であり続けます。

03 挑戦と実験が生まれる

「暮らしの朝市」は、ただ出店するだけでなく、「試してみたい」「変えてみたい」という想いを実現できる“実験の場”です。出店をきっかけに商品開発をはじめたり、他の出店者とコラボしたり、イベントやメディアに声がかかるなど、新たなチャレンジへとつながっています。今回のアンケートでも、出店経験が次の活動へと発展している実例が多数寄せられました。朝市が、個人の挑戦を受け止め、応援し合える関係性の中で育まれていることが、改めて見えてきました。

出店後に起きた変化



2025年度 新規店舗数

朝市は、経験の有無に関わらず、誰でも挑戦できる“はじまりの場”。常連の出店者たちに見守られながら、少しずつ場に馴染み、リピーターとつながっていく。この 111 という数字は、今年も多くの“挑戦”が芽吹いた証です。

「やってみたい」からはじまる場所

暮らしの朝市は、「やってみたい」が試せる実験の場。出店をきっかけに、商品開発やコラボ、新しい販路の開拓など、新たな挑戦に踏み出した出店者が多くいます。小さな一歩が次の活動につながり、自分の暮らしや働き方を少しずつ変えていく。朝市は、そんな変化のはじまりを応援する場所として、今日も続いています。

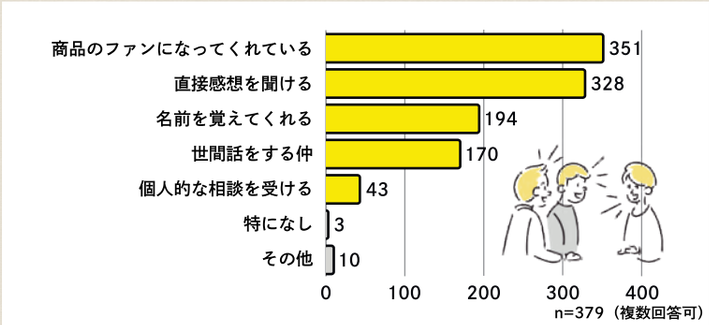
04 農・手仕事・地域とつながる暮らし

暮らしの朝市では、畑で採れた野菜や手づくりの品々が、出店者の言葉とともに丁寧に手渡されます。モノを介して人が出会い、会話し、信頼が育つ場所です。出店者同士のコラボレーションや、来場者との交流から、新たな地域のつながりが自然と生まれています。アンケートでは、コラボ件数や交流エピソードから、農や手仕事を通じた助け合いの文化、そして“地域の仲間”としての関係が、多くの具体的なかたちで可視化されました。

出店者同士のつながり

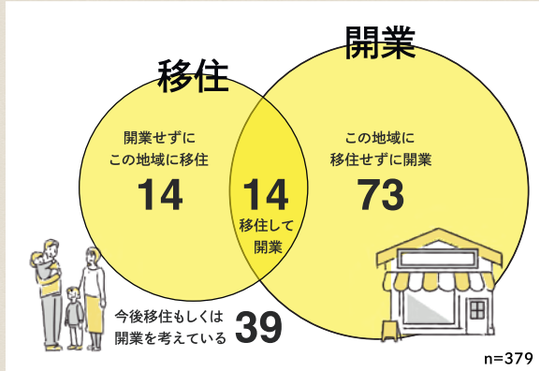
暮らしの朝市では、出店者同士の自然なつながりから、「共同出店」や「商品開発」「別イベントの共催」など、105 件のコラボが生まれています。朝市内での関係性が、互いの活動を支え合い、ビジネスや挑戦の土台となっています。アンケートでも「朝市で出会った人と一緒に新しい活動を始めた」という声が複数あり、“助け合い”が生まれる土壌があることが見えてきました。

お客さんとのつながりについて



「暮らしの朝市」では、ただモノを売るだけでなく、出店者と来場者が会話を交わし、関係が生まれることが大きな魅力のひとつです。アンケートでは、「お客さんと SNS でつながり、イベント外でもやりとりが続いている」「ファンができ、他の出店も応援してくれるようになった」などの声が寄せられました。中には「出店をきっかけに移住を決意した」「出会いから地域でお店を開いた」という人も。
朝市は“地域との入口”として機能し、小さな関係の積み重ねが、新たな営みや助け合いへとつながっています。

朝市がきっかけの移住・開業について



出店をきっかけに、“暮らし”そのものが動き出す人も少なくありません。アンケートでは、移住や開業を「考えている」人が 39 名、すでに移住と開業の両方をした人が 14 名、「移住のみ」が 14 名、「開業のみ」が 73 名と、合計 140 名以上が朝市をきっかけに何らかの“動き”を起こしています。
暮らしの朝市は、ただのマーケットではなく、
「自分のつくったものを届けたい」「もっと自分らしく働きたい」という想いに寄り添い、小さな一歩を踏み出す“はじまりの場”です。
その一歩が、土地を変え、暮らしを変え、人生を変える力になっていることが、数字からも見えてきました。

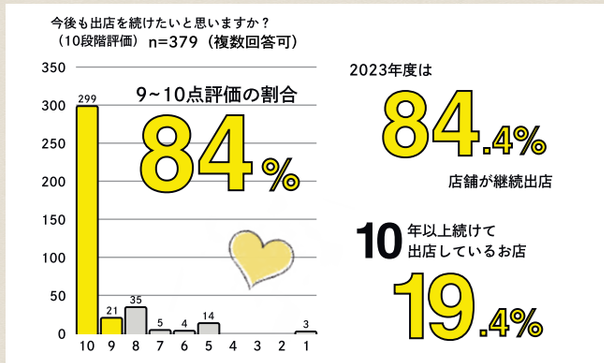
ここでの出会いが、誰かの暮らしの拠点になる。

出店者と来場者が顔を合わせ、言葉を交わすことから生まれる関係性。暮らしの朝市は、地域と人とをゆるやかにつなぐ場として、多くの出店者にとって“暮らしの拠点”になりつつあります。世間話から深い対話へ、出会いから仲間づくりへ。ここで生まれたつながりが、新たな暮らしや挑戦をそっと支えています。

05 続けることで育つ、営みと信頼

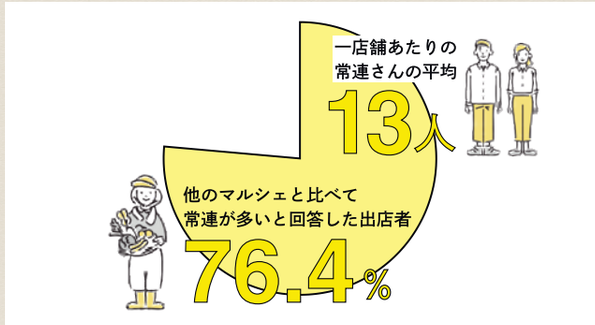
「暮らしの朝市」は、毎月の営みを重ねることで、出店者と来場者の間に少しずつ信頼が育まれてきました。長年出店を続ける人が多く、常連のお客さんとの関係性が、安心感や文化のようなものをつくり出しています。アンケートでは、高い継続出店率や常連客の存在が励みになっている実例が多数見られました。季節や天候に左右されながらも続けてきたその姿勢が、信頼を生み、地域に根ざした小さな経済の一端として機能していることが、数字とエピソードの両面から見えてきました。

出店継続について



多くの出店者が、毎月の営みを“続けること”そのものに意味を感じながら出店を重ねています。出店を続けることで、地域に根づき、風景の一部のような存在になっている人も少なくありません。「毎月ここで会えることが励みになる」「お客さんの顔を見ると、自分のペースで頑張ろうと思える」
そんな声が積み重なり、朝市は“売る・買う”を超えて、信頼と営みの関係性を育む場として続いています。

常連さんについて



暮らしの朝市では、“買う人”と“売る人”の間に、顔の見える関係性が生まれています。出店者にとって常連さんは、商品の感想を伝えてくれる相手であり、見守ってくれる存在。
エピソードでも、「毎月顔を見せてくれる」「お子さんの成長を一緒に見守ってきた」など、出店者の 11.2％が常連さんとの関係について語っています。「また来月ね」「楽しみにしてたよ」そんな言葉のやりとりが、朝市の空気をつくっています。

顔を合わせて、言葉を交わして、信頼になっていく。

**「毎月ここに来るのが楽しみ」と声をかけてくれる人がいること、それに応えるように商品や接客を磨き続ける出店者がいること。それは単なる“販売”ではなく、人と人との信頼関係の中で循環する、あたたかな営みです。
朝市が長く続いてきた理由は、売上や規模だけでは語れない、こうした関係性の積み重ねにあります。**

飯尾 うらら Urara Iio

1979 年愛知県生まれ。大学卒業後理学療法士として病院勤務するも、地に足のついた生活を求め、結婚と同時に農的暮らしをスタートさせる。
愛知県津島市で、体験農園みんパタプロジェクト、かき氷と沖縄そばの店 INUUNIQ VILLAGE を運営する傍ら、暮らしの朝市を主催する。東海地方を中心とするマルシェイベントのコーディネーター、関係者や地域の人々とのパイプ役として活動。3 兄弟（13 歳、8 歳、5 歳）の母親業も同時進行しながら、食・農・暮らしをテーマに自然に寄り添う生き方を提案している。

01 自分の手で育て、自分の言葉で届ける暮らし

「暮らしの朝市」を始めたきっかけは、すごく個人的なことだったの。私は、いい大学に入って、いい会社に就職することが幸せなんだって思い込んでたんだけど、その生き方がどうしてもしんどくて。そんな時、バックパッカーとして世界を旅して、インドやタイのマーケットで、生き生きとした人たちの姿に出会ったんだよね。農家さんやアーティストが、自分で作ったものを、自分の言葉で伝えながら売ってる姿を見て、「きちんと地に足のついた、自分を主軸に置いた暮らしがしたいなあ」って、心から思った。それが、暮らしの朝市の源流にある「農」に、私がたどり着いた理由なんだと思う。

結婚してからは、名古屋の北区でオーガニックカフェを営業しながら、畑も耕してて。自分で育てた野菜を料理して、提供して、販売するっていう日々だったんだけど、そんな中で甚目寺観音とのご縁があって、仲間に声をかけて「手作り朝市」を開いたのがはじまり。最初は「手作り朝市」っていう名前で、「運営も手作りです！」って感じで、手探りだったけど、一生懸命育てた野菜をお客さんが喜んでくれて、「ありがとう」って言ってもらえた時のことは、今でも鮮明に覚えてる。

その頃、「マルシェ」って言葉が流行ってたけど、私たちはあえて「朝市」って呼ぶことにしたの。流行りじゃなくて、暮らしの延長にある場所にしたかったから。大量流通してるものは販売しない。でもね、そういう流れからドロップアウトして、自分の力でお店をやりながら暮らしてる人たち——私自身も含めて、そういう仲間を応援したいっていう気持ちが、すごく強かったんだよね。この朝市をきっかけに、小さな規模で頑張っている人たちが、少しずつ活性化していけたら。それが、私の根っこの願いなんだと思ってる。

02 物を売るだけじゃない、「暮らし」がまざり合う場

暮らしの朝市は、農家さんだけじゃなくて、パン屋さん、お菓子屋さん、キッチンカー、洋服や器をつくる人、お店を持ってる人もいれば、持ってない人もいて、本当に多種多様な人たちが関わってくれてる場所なんだよね。大学卒業後に住んでた沖縄のチャンプルー文化に影響を受けてて、できるだけいろんなジャンルの人たちが混ざり合うようにしてきたの。ジャンルとか思想に偏らず、いろんな価値観を持った人が関われる場にしたかったんだよね。

この朝市の運営って、最初はほんとに「自分のため」だった。でもそれが、結果として「みんなが心地よく暮らせること」につながってきたなって思う。子育てしながらでも出店できるように、テントのそばに車を停められるようにしたり、キッズスペースやおむつ替え・授乳スペースを用意したり、いろんな工夫をしてきたの。私自身が子ども 3 人をおんぶしながら運営してきたからこそ、そうしないと自分も出られなかったし、結果的に出店者同士が自然と助け合える関係ができていったなって思う。

出店者の選考でも、すでに確立されてる人よりも、これからやっていきたいっていう思いがある人も積極的に受け入れてる。経験を持った人も、これからの人も、お互いがうまく混ざる場にしていきたくて。どんな出店者がいるかで、朝市の空気感ってほんとに変わるから、すごく大事なところなんだよね。「この人とこの人を組み合わせたら面白いかも」っていう実験の場も増やしてて、みんながチャレンジできる場所にしたいっていう気持ちがあるの。

誰でも来られる場所にしたいし、いろんな人が混ざり合うからこそ、それぞれの価値観が交差して、結果的にちょうどいいバランス、中庸が取れていく。そういう空気感が、暮らしの朝市らしさなんじゃないかなって感じがする。

03 「完璧じゃない場所」だからこそ、一緒に育てていきたい

暮らしの朝市が目指しているのは、単にモノを売り買いする場所じゃないんだよね。自分の足で立って、自分のペースで暮らしていく。でも、それは「一人でなんとかする」ってことじゃなくて、つながりながら、自分らしく生きるってこと。野菜を育てる人がいて、それを料理する人がいて、食べる人がいる。そうやって、いろんな営みがつながっていくことで、社会がちょっとずつ豊かになっていく。そういう場を作っていきたいって思ってる。

最近は、若い子たちが「自分らしい仕事や暮らしをしたい」って出店してくることが増えてて、そういう子たちの「やってみたい」を応援したい気持ちがすごく強い。朝市が、誰かにとって「自分の暮らしを取り戻す」きっかけになってくれたら嬉しいし、「どう暮らしていきたいか」を一緒に考え続けられる場所にしたい。
関わる人の範囲も、もっと広げていきたいなと思ってるんだよね。この地域以外でも暮らしの朝市が生まれて、そことこっちがつながっていく。それぞれの土地で根を張ってる人たちと、一緒に伴走していけたら楽しいなって思う。自分たちが主催したいってわけじゃなくて、その地域にいる人たちの思いが主軸だから、そこを大切にしたいんだよね。お客さんと出店者、運営者っていう立場を分けるんじゃなくて、「関わるすべての人たち」っていう視点で考えたい。

みんなでマーケットをつくっていく関係性が、この朝市のいちばんの特徴。東別院のマーケットでも、出店者同士のつながりがきっかけで、新しい仕事が生まれたり、一緒に何かやる流れになったりすることもよくあるし、そういうのを見ると「ここが完璧じゃないからこそ、一緒に育てていける場所なんだな」って思えるんだよね。

飯尾 裕光　Hiromitsu Iio

1975 年生まれ。愛知県津島市「自然食品・天然雑貨のお店　株式会社りんねしゃ（1979 年創業）」の 2 代目として日本の有機農業自然食運動の変遷を、幼少期から体験し、里山の農と食と暮らしに魅了される。
2006 年にオーガニックカフェを創業し、2014 年より都市近郊型体験農園を運営、事業の拡大を機に 2020 年農業法人「株式会社みんパタプロジェクト」設立。
また、2008 年から北海道紋別郡滝上町で多面的農業を学ぶ循環型農場を設立し、愛知と北海道の二拠点で、農場運営とアウトドアフィールドでの食と農に関わるアグリビジネスを展開。
県内で月 8 回程度の朝市を定期開催している、朝市運営の専門家でもある。

01 みんなが持続的に関われる 搾取や支配ではない「朝市」という仕組み

子どもの頃から自然の中で農業を中心とした暮らしをしてきたけど、両親が会社経営をしていたこともあって、農と商の両方の感覚が自然と身についていたと思う。
大学では「農業・農村の持続性」を専門的に学んで、いかに日本の農業や農村の営みが長い歴史と時間をかけて成り立ってきたのかを知った。

幼少から大学での学びの中で、農業や自然は「多様性・公平性・多層性」の 3 つが揃わないと持続性が失われるってことを理解した。この考え方が自分の全部のベースにある。持続可能な社会っていうのは、このバランスが常に均衡を保っている状態のことで、これはもう自然の摂理なんだよ。

農家が産直で販売する機会をつくりたいって思ったとき、日本の「朝市」という場には、その「多様性・公平性・多層性」がすでに組み込まれていると思った。歴史的な背景もあるし、お年寄りから子どもまで、どの世代でも自然に関われる。だからこそ「マルシェ」じゃなくて「朝市」という言葉にこだわった。言葉としてのおしゃれさよりも、誰にでも伝わって、受け継がれてきた文化としての「朝市」の強さを大事にしたかった。

今、世の中って、資本が一部の人などに集中しやすい構造になっていて、それはつまり、搾取や支配が起きやすいってこと。だから、「朝市」という形を通して、そういう構造とは違う仕組みを作りたかった。出店者が、自分でつくったものを自分で売るっていう、めちゃくちゃシンプルな形。でもそこにこそ、力がある。

そうした歴史的な背景や力を現代に引き継ぐ意味でも、「手づくりの人たちが集まれる場所をつくろう」って思って、てづくり朝市を始めた。「自分で作って、自分で売る」。朝市は搾取や支配じゃなくて、みんなが持続的に関われる仕組みでありたいと思ってる。

02 埋もれている、本来の「大切なもの」を、掘り起こす

暮らしの朝市って、“マイニング”だと思ってる。なにか新しいものを作ってるわけじゃなくて、すでにこの社会の中に埋もれてしまった価値、でも本当はずっとそこにあった大切なものを、もう一度掘り起こして、再発見する行為だと思う。

近代化の中で、暮らしの中にあった貨幣化されない「内部経済」、たとえば家事や家庭菜園、大切に直して使うこと、子どもや地域を育てること、そういうものがどんどん外部化されていって、お金で買うものになった。結果として「やらなくてもいいこと」が増えて、社会の収益は上がったかもしれないけど、何か大切なものが失われてしまったんじゃないかと思う。

朝市は、それを再び見つけ出す場所。個人が埋もれてた技や感性を、関係性の中で再発見して、それを形にして世に出して、他の誰かが受け取ってくれる。そこから、一人一人に役割や居場所が生まれる。たとえば、子どもの頃から

折り紙が好きで、すごく精度の高い作品をつくれる人がいたとして、朝市でそれを 100 円で売ったら、誰かが買ってくれる。収益としての 100 円には価値がないように思えるかもしれないけど、その 100 円には、個性や人格、その価値観、評価とつながりと、存在の証明が全部詰まってる。そこに自分の輪郭が出てくるんだ。

自分の役割があって、そこにいることで「自分の存在意義」を確認できる。しかも、それが「社会的評価」にもなっている。売れないと続けられないという責任もあるからこそ、ちゃんと成り立つ。誰かにとっての必要と、自分の想いがつながる場だからこそ、朝市にはリアルな価値があるんだと思ってる。

03 暮らしの朝市を「産業」にしたい

暮らしの朝市は、今、次のフェーズに入ってきている。10 年以上やってきて確信したのは、「この場所を必要としている人たちが確かにいる」ということ。特に印象的だったのは、コロナで売上が落ち込んだ時期でも、多くの出店者が「辞めたい」ではなく「この場を続けてほしい」と言ってくれたこと。朝市が単なる販売の場ではなく、自分の暮らしや生き方とつながった場所になっているんだと実感した。

一方で、コロナ禍の補償制度では「店舗を持たない出店者」が対象外だった。つまり、制度の中で“見えていない”ということが、大切な暮らしを守れない原因になっている。もし朝市が「産業」として認められていたら、「移動してやってる人たちだって暮らしがある」と、もっと強く嘆願できたかもしれない。制度に乗らないがゆえに、守る手立てすら持てなかった。だからこそ、朝市を産業として捉え直すことは、経済的な話というより、暮らしを守るために必要なんだ。

最近では、「自分で作ったものを自分で売りたい」という声が各地から届いている。これは単なるイベントの横展開ではなく、「自分たちの暮らしを、自分たちの手でつくっていきたい」という意思の表れだと思う。つまり“文化”ではなく、“構造”として広がってきているという感覚がある。

暮らしの朝市が生み出すうねりは、新しい「産業」として、社会の中でひとつの指標になると思っている。全国で朝市を運営する人たちが集まり、ノウハウや哲学を共有しながら、「全国朝市運営者会議」や「朝市サミット」みたいな形でつながっていけば、朝市は単なるイベントじゃなく、スーパーマーケットやデパートのように、新しい販売の仕組みとして、社会に認められていけると思ってる。

出店者の声

Stall holders' voices

おにぎりやさん

修行などの経験もなく、独学で二足のわらじではじめた活動でしたが、朝市で毎月毎出店させてもらうことでちょっとずつ自信がつき、おにぎりやさん１本でやってみようと実店舗までたどり着いたのは、間違いなく朝市のおかげだと思います。続けることの大切さは朝市から学びました。また、縁もゆかりもない愛知県で友達らしい友達もできず何年も過ごしてきましたが、朝市を通してたくさんの出店者仲間と出会い、なかには、仕事以外の時間も共有できる友達に出会えたことは財産だと思います。わたしの場合、これが一番大きかったかもな～

わたしとくらす

暮らしの朝市に出店して新しいお客様も増え、暮らしの朝市はもちろん、他のイベントや出展へもお越しくださったり、出店者様との交流の中でコラボ商品を作らせていただいたり、イベントに誘っていただいたりと初出店の時は高校を卒業しこれからの不安もたくさんありましたが、たくさんのお客様や出店者様とつながることができ、わたしが挑戦するきっかけや学びのきっかけになり、“わたしとくらす”としても、私自身も成長できる場となりました。

石窯 PIZZA 屋台 boccheno

東別院の朝市に 12 年前ぐらいから出店し続けているため、最初のころの常連さんのお子さんが大学生になって彼女を連れてきたり、キッチンカーを始めたいと相談にきた青年が、小学生の頃にお母様と一緒に東別院で自店のピザを食べてたなどの話を聞くと、歴史が刻まれれはじめ、そこに文化が生まれてきてるのが実感できうれしく思う。

めぐみ飴本舗

げんこつ飴製造・販売を始めた当初、出店の仕方も分からず、とても小さな朝市やフリーマーケットに出ていました。その頃、常連のお客様から東別院てづくり朝市の事を教えて頂き実際に見に行きましたがレベルの違いに「自分には出店は到底叶わない…」と半ば諦めていました。
その後、以前から東別院に出ていた井川さんからのお勧め･推薦も頂き、出店の機会を頂けることになりました。
初出店時に以前の常連のお客様から「絶対ここ（東別院）に出られると思ってました！」と仰った時は感動しました。

暮らしの朝市の基本情報

Information on “Kurashi no asaichi”

暮らしの朝市

暮らしの朝市

Web:https://kurashi-asaichi.jp/

Web

甚目寺観音 暮らしの朝市

甚目寺観音 暮らしの朝市

開催日：毎月 12 日 10:00-14:00
場所　：甚目寺観音境内
住所　：〒490-1111 愛知県あま市甚目寺東門前 24
最寄駅：名鉄津島線「甚目寺駅」より徒歩５分
Instagram: @jimokujiasaichi / Web: https://higashi-asaichi.jp/jimokujitt

Instagram　Web

東別院 暮らしの朝市

東別院 暮らしの朝市

開催日：毎月 8 日 18 日 28 日 10:00-14:00
場所　：真宗大谷派名古屋別院 (東別院) 境内
住所　：〒460-0016 名古屋市中区橘 2-8-55
最寄駅：地下鉄名城線「東別院駅」4 番出口より西へ徒歩 3 分
Instagram: @higashibetsuin_asaichi / Web: https://higashi-asaichi.jp/higashi

Instagram　Web

みんパタ 暮らしの朝市

みんパタ 暮らしの朝市

開催日：毎週土曜日 10:00-14:00
場所　：津島市 みんパタ農園 のこぎり屋根倉庫
住所　：〒496-0004 愛知県津島市蛭間町弁日９１
最寄駅：名鉄津島線「甚目寺駅」より徒歩５分
Instagram: @minpata_project / Web: https://higashi-asaichi.jp/minpata

Instagram　Web

ひがほん 暮らしの朝市

ひがほん 暮らしの朝市

開催日　：６月～11 月 / 毎月 2 回 / 8 日・第 4 日曜日
開催時間：10:00-14:00
場所　　：東本願寺札幌別院
住所　　：札幌市中央区南７条西８丁目２９０番地
Instagram: @higahon_sapporo

Instagram

Hisaya market

Hisaya market

開催日：毎月 10 日 10:00-15:00
場所　：Hisaya odori Park zone1 シバフヒロバ
住所　：〒460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内３丁目６
Instagram: @hisayamarket_official / Web: https://rhp.nagoya/event/entry-230.html

Instagram　Web

Sustainable Marché

ミッドランドスクエア・サスティナブル・マルシェ

開催時期：３月・８月（年2回、1週間の開催）
場所　　：ミッドランドスクエア 商業棟 B1F アトリウム
住所　　：〒450-0002 愛知県名古屋市中村区名駅4丁目7−1